

私が子どもの頃を思い返すと、図画工作・美術の授業は自由で楽しい雰囲気であった記憶しかない。そのおかげか、現在ではその楽しさを伝えるために（もちろん楽しさだけを伝える授業をしているわけではないが）大学で図画工作・美術教育の教鞭をとる立場にも恵まれた。

そもそも図画工作・美術の授業は、他の科目の授業とは雰囲気違っていった。語弊がないように言うが、図工や美術の授業といえば、全員が前を向いて黙って静かに受けるわけでもなく、ノートに板書を書き写すこともない。そして、友

コロナ禍の授業に思う

楽しくて仕方なかった。そして何より、図工室や美術室のあのなんとも言えない自由な「空気」にすっかり魅了されたものである。

時は経て2020年、コロナウイルスの猛威は、日常生活だけでなく、社会様式や教育の方法にも変化をもたらした。これまで当たり前であった対面型の授業から、ICT、デジタル教材、学習支援コンテンツや動画を活用した、いわゆるオンライン型の授業へと変容は一気に加速した。大学においてもこういった技術駆使すれば、これまで対面で行ってきた授業内容を十分に再現し、その質を担保することが可能となってきた。

しかし、図画工作・美術という実際の「ものづくり」を教える立場の私は、そういった授業に何かもの足り

することを指しているのではない。それぞれの児童生徒が「学びに向かう雰囲気」を感じ取り、味わう空気である。授業においては、これが非常に大切で、これはオンラインの授業ではどうしても伝わりにくく、共有しにくいのだ。

例えば、オンラインの授業では、対面の授業に比べて、妙に静かに授業が進行する。学生の授業中のおしやべりは起きない。普通に考えればよいのだが、オンライン型の授業では、学生が意欲的に学びに向かっているかどうかの空気を感じとれない上に、そもそも授業に集中していない学生が空気を乱すという行為も存在しないからだ。

そう考えると、私が子どもの頃に図工・美術の授業で感じていた自由に楽しみながらも意欲的に学びに向かっていた空気は、貴重な教育の「場」と「時間」の共有であり、自分の感性の源であったことを今さらながら実感するのである。

もちろん3密を避け、児童生徒・学生の安心安全を保証する教育活動が大前提であることは言うまでもないが、学生自身もそんな空気を味わうことができる「懐かしい授業」を渴望していることだろう。久しぶりの対面授業で図工室を訪れた学生が「あ、図工室のこの匂い懐かしい」とつぶやき、制作に熱心に取り組む姿を見て、1日も早く安心して空気を味わえる日々の訪れを願わずにはいられない。

「空気」の

ありがたさ

達と自由におしゃべりすることや互いの作品を覗いて見て回ることが許され、思い思いに活動できることが



名古屋経済大学
人間生活科学部教授
塚本 敏浩

つかもと・としひろ 図画工作
・美術教育。愛知教育大学大学院
教育学研究科修士課程修了。19
70年生まれ。

なさを感じ始めていた。その足りないものは、自分が子どもの頃に味わった授業の空気ではなからうか、と。

これまで20余年にわたり小中学校教員として児童生徒と関わってきた実務家教員の私は、多くの教育現場で「空気を読む」ことの大切さを伝えてきた。ここでいう空気を読むとは、何事にも迎合したり、同調圧力に忖度（そんたく）したり

